竜田御坊山３号墳の再検討と被葬者像

絹　畠　　歩
前　田　俊　雄
北　井　利　幸

目　次

Ⅰ．はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
Ⅱ．竜田御坊山３号墳をめぐる学史と問題の所在　・・・・ 3
Ⅲ．横口式石槨の検討・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
Ⅳ．出土陶棺の検討　・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
Ⅴ．考察　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
Ⅵ．結語　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

論　文　要　旨

2015 年度に竜田御坊山３号墳の横口式石槨と陶棺について再調査を行った。その結果、横口式石槨は内面全体に漆喰を精緻に塗布していたことや石を切り出す際の工具痕跡を確認した。また陶棺は、蓋部と身部が別個体であること、脚部と蓋下端部、身上端部が削られており、脚部については横口式石槨の内法の高さに合わせて調整された可能性が高いことなどが明らかとなった。このような事実は、陶棺が被葬者の不慮の死に対応した「急ごしらえの棺」であったことを示すと考える。以上を総合し、築造年代を７世紀中葉ごろとみて、被葬者が上宮王家の一族である可能性を改めて強調した。

絹畠　　歩（きぬはた　あゆむ）
　　奈良県立橿原考古学研究所　主任研究員
前田　俊雄（まえだ　としお）
　　奈良県立橿原考古学研究所　主任研究員
　　（兼　奈良県文化財保存課　主査）
北井　利幸（きたい　としゆき）
　　奈良県立橿原考古学研究所　指導研究員

Ⅰ．はじめに

竜田御坊山 3 号墳は、奈良県生駒郡斑鳩町竜田 1 丁目に位置する終末期古墳である。1965 年、工事中に不時発見され、橿原考古学研究所によって調査された。横口式石槨を埋葬施設として、漆塗の陶棺をその中に納め、さらに副葬品として琥珀製枕、三彩有蓋円面硯、ガラス製筆管を有しているという点において、今日まで他に類例が認められない古墳である。調査後、横口式石槨は大和歴史館の前庭に移設され、1980 年の奈良県立橿原考古学研究所附属博物館の新館開館に伴ってその前庭に移設された。また陶棺と副葬品は、博物館に常設展示された。その後横口式石槨についての研究と副葬品、被葬者像についての研究が個別に進んでいる。なお、横口式石槨及び陶棺と副葬品は、その重要性が鑑みられ、1981 年重要文化財に指定された（大和御坊山第三号墳出土品）。

一方、2015 年度に、横口式石槨及び陶棺の再調査を行う機会を得て、横口式石槨を北井、陶棺を前田・絹畠が中心となり調査したところ、これまで報告書などで公開されてきたこととは異なる多くの新たな知見を得た。その成果に関しては、一部報道発表や 2016 年 3 月から 4 月に橿原考古学研究所附属博物館で開催した特別陳列「竜田御坊山 3 号墳」展の研究講座等において報告してきたが、正式に文章として報告することができず、今日に至った。本稿では、横口式石槨と陶棺に関する新知見の報告を行うことにより、それぞれの新たな評価、さらには竜田御坊山 3 号墳の築造年代と被葬者像について迫りたい。

（絹畠）

Ⅱ．竜田御坊山 3 号墳をめぐる学史と問題の所在

（1）周辺の歴史的環境

竜田御坊山 3 号墳周辺の古墳時代後期から飛鳥時代にかけての遺跡を概観する。

当地域の後期古墳としては、まず藤ノ木古墳が挙げられる。直径 50m 以上の円墳であり、石室内から多くの金銅製品などが未盗掘で確認された。築造時期は 6 世紀後半である。法隆寺の北に所在する仏塚古墳は一辺約 23m の方墳であり、6 世紀後半に築造されたと考えられる。横穴式石室内より 2 基以上の土師質亀甲形陶棺破片が出土している。竜田御坊山古墳群と同丘陵に所在し、同時期の古墳とも考えられていた甲塚古墳は、近年の奈良大学文学部文化財学科考古学研究室による発掘調査において、墳頂部から重圏文鏡が出土したことにより、藤ノ木古墳以前の首長墓で古墳時代中期中葉以降のものと想定されている。そのほか、春日古墳（直径 30m、円墳）、寺山古墳群（2 基）、寺

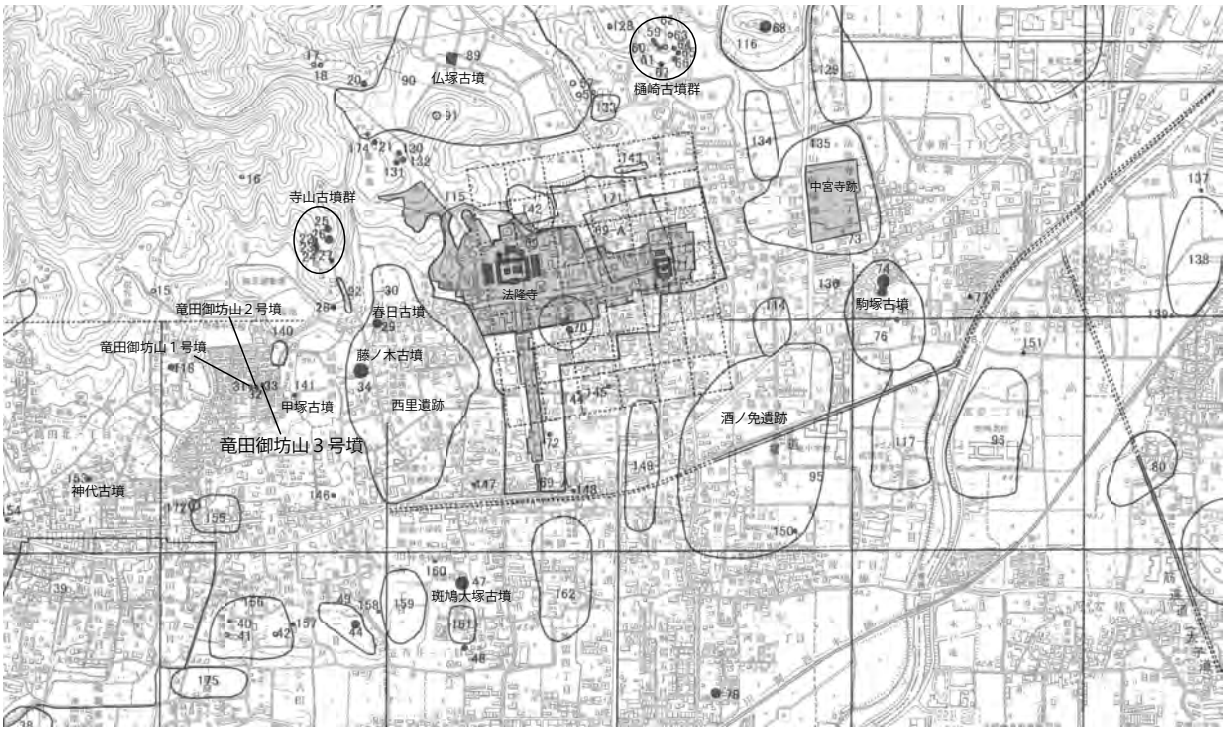


図 1　竜田御坊山 3 号墳位置（S=1/20,000)（『奈良県遺跡地図 07D』を改変・利用）

山横穴墓群（3 基)、樋崎古墳群（8 基)、神南古墳群（5 基）などがあるが、発掘調査がなされておらず、詳細は不明である。

竜田御坊山古墳群は、終末期古墳に位置づけられる。1964 年に 1 号墳・2 号墳の 2 基が工事により破壊された。翌年の 1965 年に近隣で再び 3 号墳が工事中に発見され、こちらに関しては発掘調査が行われた。1 号墳は、聞き取りによると、長さ約 2 m、幅約 1.7m の竪穴式石室状の主体部を有していたとされる。石室内部には 3 体の人骨が埋葬され、金銅製環座金具が出土している。2 号墳は、横穴式石室と考えられ、組合式家形石棺の破片が出土している。いずれも 7 世紀前葉から中葉にかけての築造と考えられる。

今回論究する 3 号墳は、墳丘径 8 m 以上の円墳であり、埋葬施設には横口式石槨が採用されていた。横口式石槨は底石、蓋石、閉塞石の 3 石で構成される。それぞれのサイズについては、再調査の結果、報告時の法量とは異なっていたため、後に触れる。内部の空間内には漆喰が塗布されていた。また横口式石槨内には､須恵質（系）四注（寄棟）式家形陶棺が収められており、外面に漆が塗布されていた。陶棺内には人骨が残存しており、副葬品として琥珀製枕、三彩有蓋円面硯、ガラス製筆管が納められていた。このような陶棺と副葬品を持つ終末期古墳は、その後も類例がなく、高貴な身分を示すとともに、非常に特異なものである。なお、斑鳩地域の終末期古墳としては、他に神代古墳などが挙げられるが、未調査のため詳細は不明である。

さらに、当地域の飛鳥時代の動向として必ず挙げなければならないのが、斑鳩宮と法隆寺・中宮寺などの寺院の動向である。斑鳩宮は、推古 9（601）年に厩戸皇子（聖徳太子）が飛鳥より当地に移住することを決め､推古 13（605)年に、移り住んだとされる。法隆寺は斑鳩宮に接して建立され、現西院伽藍の南東の若草伽藍跡が創建期の法隆寺であるとされる。また周辺の中宮寺[1)]、法起寺、法輪寺なども 7 世紀代の創建と伝わる。このような地域の歴史的環境の中で、竜田御坊山 3 号墳が築造される。

（2）竜田御坊山 3 号墳をめぐる学史

本節では、個別の学史を述べていきたい。

横口式石槨　横口式石槨については、報告書内で類似例として奈良県明日香村鬼の俎・雪隠古墳が挙げられている。また、使用尺の検討から、竜田御坊山 3 号墳の横口式石槨は、7 世紀中葉以前に用いられていた高麗尺が使用されていたとし、年代決定の目安となるとされた（泉森編 1977)。

広瀬和雄は、刳り抜いた巨石で玄室が構成される C 型に分類し、680 年～ 700 年ごろの 5 期に位置づけた（広瀬 1995)。この位置づけは、竜田御坊山 3 号墳が刳り抜き式の石槨の中では小型で簡素な造りであるためと考えられる。

山本彰は、大阪南部地域の横口式石槨の編年の中で、竜田御坊山 3 号墳を平尾山西峯古墳と同時期同系列の 7 世紀第 3 四半期に置いた（山本 2007)。

近年、重見泰は、刳り抜き式石槨の検討の中で、竜田御坊山 3 号墳を羨道が無いⅡ型式に分類し、年代の後出的要素とされてきた省略化がなされた簡素な造りであるという事実を、完成する前段階の試行段階であるとして、Ⅱ型式最初の段階であるⅡ 1 型式とした（重見 2017)。さらに、副葬品の年代や被葬者が上宮王家と関連がある人物であるとの想定を踏まえて、その年代を 7 世紀中頃とした。

陶棺　陶棺については、報告時に須恵質（系）四注（寄棟）式家形陶棺を土師質亀甲形、須恵質亀甲形に後続して登場するものと捉え、さらに四注（寄棟）式家形陶棺の中でも、大阪府豊中市金塚古墳のような大型のものに後続するとされた（泉森編 1977)。また他の陶棺の時期から 7 世紀中葉を下らないものと考えられた。

その後、木村泰彦が行った分類において、竜田御坊山 3 号墳例は須恵質陶棺の最終段階のものとされた（木村 1979)。その根拠として、蓋下端部・身上端部の合わせ部形態の簡略化、低脚化などが挙げられている。一方で、このタイプに属するものは竜田御坊山 3 号墳の一例のみであるとされる。木村の見解はその後も陶棺の分類・編年研究において基本的に支持され（宮本 1994、宮岡 2012、絹畠 2013 など)、現在に至っている。

また製作技術のグルーピングに基づく中村展子の検討によれば、竜田御坊山 3 号墳例は製作グループには属さない単発的生産であるとされた（中村 2004)。

このように陶棺では、最終段階に位置づけられるものの、本例 1 例のみが属し、また製作グループでも単発的生産であると考えられてきている。

副葬品　先に挙げたように、副葬品の琥珀製枕、三彩有蓋円面硯、ガラス製筆管は、日本列島での出土例がない。

琥珀製枕については、室賀照子・竹中亨による産地分析

が行われ、岩手県久慈産と同定されている（室賀・竹中 1989）。類例がないために、考古学的評価は難しいが、白井久美子が石枕からの系譜を考慮すべきであることを指摘している（白井 2009）。

三彩有蓋円面硯については、報告書では唐代初頭の時期のものと類似することから、初唐前後の中国、あるいは中国文化圏のどこかで製作され、日本へ舶載されたものとしている（泉森編 1977）。その後も、当品の類例は増えていないが、陶磁研究では中国からの搬入品説（李 1985、土橋 2001 など）と、朝鮮半島からの搬入品説（楢崎 1977、白井 2000 など）の大きく 2 説に分かれている。河上邦彦は、中国搬入品説を支持し、竜田御坊山 3 号墳の年代を 7 世紀前半から中頃とした（河上 1995）。

ガラス製筆管は、報告書において、円面硯とセットで出土したことから、王羲之著『筆経』内に見られるガラス製の筆管であった可能性が指摘されている（泉森編 1977）。調査当時は同時期の中国においても類例が認められなかったが、その後、608 年に埋葬されたと考えられる李静訓墓から類似品が出土したことから（中国社会科学院考古研究所編 1980）、筆管の可能性を強めているが、依然筆管でない可能性もある（泉森 1986）。

人骨　陶棺内には人骨が良好な状態で残存しており、発掘調査の際には、生駒栄喜の鑑定により、成年男性であるとされた（生駒 1977）。その後、池田次郎による再度の鑑定により、14 ～ 15 歳の男性にまで絞り込まれている（池田 1986）。また身長は 150cm 程度で、陶棺の内法より背が高いことも特筆される。

被葬者像　報告者の泉森は、竜田御坊山古墳群を 7 世紀中葉の築造として、斑鳩地域に関わりの深い上宮王家の一族であるとした（泉森編 1977）。また、竜田御坊山 3 号墳の被葬者を、人骨と副葬品の所見から文人的性格を持つ青年男子であるとし、上宮王家一族とした。山内紀嗣は、竜田御坊山 1 ～ 3 号墳及び周辺の神代古墳の年代を 7 世紀中葉として、皇極 2（643）年の上宮王家滅亡と関連付けて、上宮王家一族がこれらの古墳の被葬者であることをさらに強調している（山内 1998）。

（3）問題の所在

はじめに述べたとおり、2015 年度に横口式石槨と陶棺の再調査を行うこととなり、その調査を行った結果、これまで知られている事実に加えて、多くの新知見を得ることができた。横口式石槨と陶棺については、報告書刊行後個々の研究が進展し、竜田御坊山 3 号墳例もそれぞれで位置づけが示されてきた。特に陶棺では、低脚であることや蓋下端部と身上端部の断面形態などが、近畿地域の須恵質陶棺の編年上、最終段階を示すものとされてきた。本稿では、本墳例を再度詳細に観察し、そこで明らかとなった新たな所見について報告を行う。

（絹畠）

Ⅲ．横口式石槨の検討

横口式石槨は、1980 年の奈良県立橿原考古学研究所附属博物館新館開館に伴って前庭に移設されて以降、石槨表面に苔が繁茂し始めた。そこで資料を保護する観点から屋内に移設するとともに苔類の除去を行った。作業を行うにあたり石槨を解体したため、合わせて三次元形状計測を実施した。

計測には、ドイツ GOM 社製の ATOS CompactScan 5 M システムを使用した。レンズは MV300 で計測点間距離は 124μm である。計測は、2016 年 1 月から 3 月にかけて実施した。その後、蓋石の一部に計測不足が判明したため、2020 年 8 月に補足計測を行った。この計測ではドイツ GOM 社製の ATOS CompactScan12M システムを使用した。レンズは MV600 で計測点間距離は 146μm である。計測データはいずれも GOM 社製の ATOS v6.3.0- 9 を使用して図化した。計測したデータ上に欠落やノイズが認められる。特にデータの欠落は、データ上に空白となって表れる（図 2 ～ 7）。

この調査で新たに判明したことを以下に報告する。横口式石槨は蓋石、底石、閉塞石の 3 石からなる。法量は三次元形状計測画像から計測した。以下の通りである。

蓋石　　最大長 286cm　最大幅 161cm　最大高 93cm
　刳込部　奥行 216cm
　　幅（天井部）68cm（入口側）～ 66cm（奥側）
　　高　　52cm（入口側）～ 51cm（奥側）
底石　　最大長 293cm　最大幅 167cm　最大高 57cm
　方形造出し部　長 225cm
　　幅 69cm（入口側）～ 68cm（奥側）
　　立ち上がり高　1 ～ 1.5cm
閉塞石　　最大幅 111cm　最大高 90cm　最大厚 35cm

各石を再調査した結果、次のことを新たに確認した。①

再計測により各石の法量が確定した。②蓋石と底石の接地面に漆喰を確認した（写真 2）。③蓋石刳込部側面と底石上面に漆喰を確認した（写真 3・4）。④底石の入口側の段彫りした仕口を再確認した(図 5)。⑤蓋石の上面と側面、底石の底面、閉塞石の外面に石を切り出す際の溝状の工具痕跡を確認した（写真 1、図 2・4・5）。

（北井）

Ⅳ．出土陶棺の検討

（1）再調査から得られた新知見の概要

今回の再調査の結果、石槨同様に出土陶棺についても多くの新知見を得ることができた。まずはその新知見の概要を記す。

1 点目は陶棺の身と蓋のサイズが異なっていることから、元来製作時のセットではなかったものを組み合わせて 1 つの棺として使用している点である。

図 2　閉塞石（三次元形状計測画像）(S=1/50)

2 点目は蓋短側面の円孔を塞ぐための陶栓のサイズが、円孔自体の大きさと異なり小さいという点である。

3 点目は身上端部および蓋下端部が削り取られている点である。身上端部は大きく削られており、蓋の受け部も多くがなくなっている。また身の長側面には小孔が穿たれているが、身が削られたことによって小孔が半裁されてしまっている。

4 点目は身の脚部が大きく削り取られ、あたかも低い脚部をもつかのようにみえる点である。

5 点目は陶棺に塗布された漆の範囲が判明した点である。身の底部外面にまで漆が塗布されていることが判明した。

以下、それぞれの新知見と、その意味を検討する。

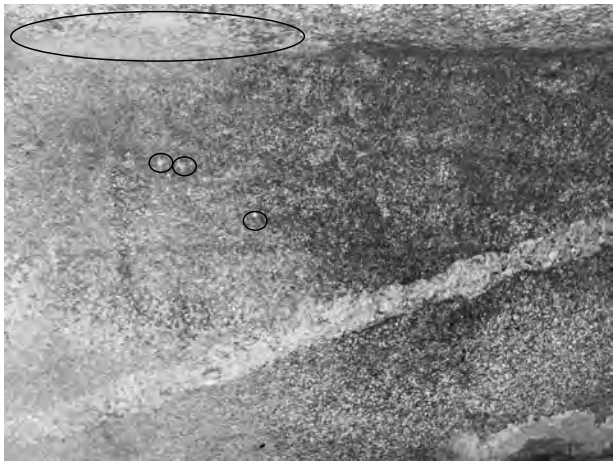


写真 3　蓋石刳込部側面の漆喰
（○部分。上が天井側、図 3 － c ）

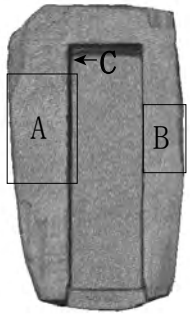


図 3　蓋石部分
写真撮影位置図

写真 1　蓋石刳込部の加工痕跡
（図 3 － A）

写真 2　蓋石接地面に残る漆喰
（図 3 － B）

写真 4　底石上面の漆喰

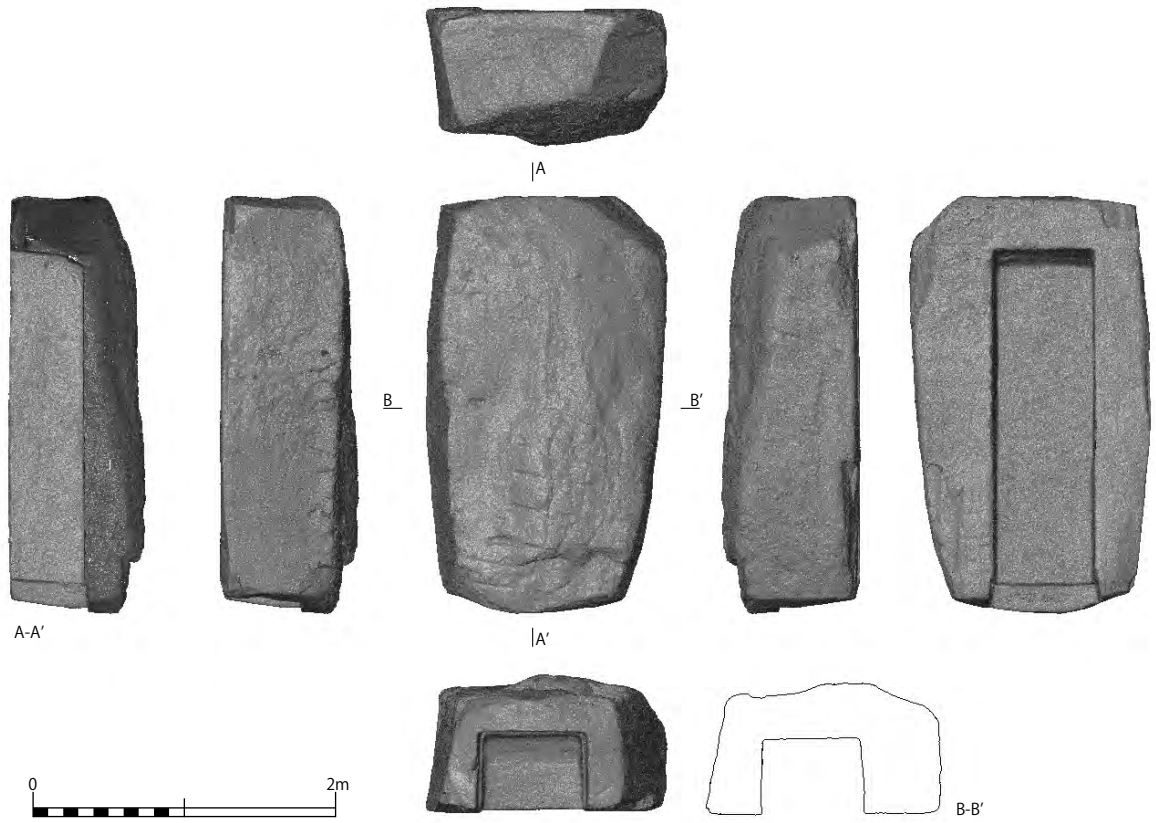


図４　蓋石（三次元形状計測画像）（S=1/50)

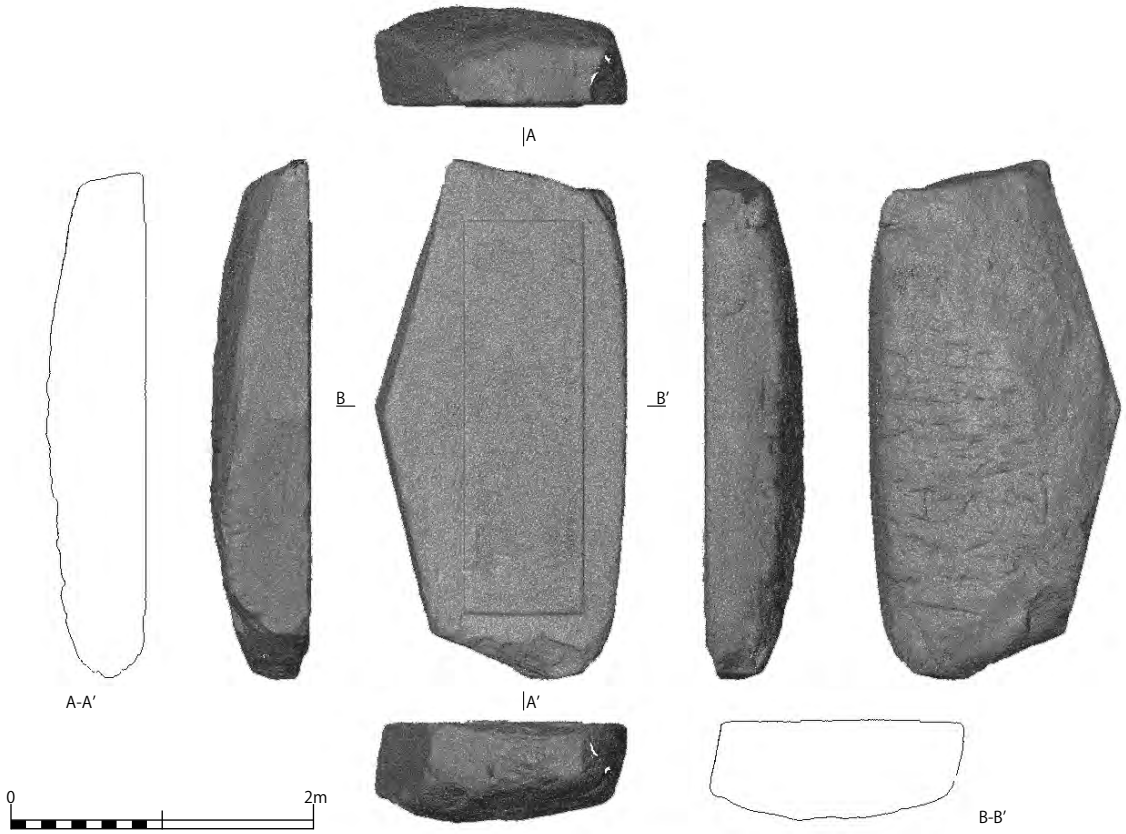


図５　底石（三次元形状計測画像）（S=1/50)

（2）新知見の内容

組み合わされた異なるセットの身と蓋　竜田御坊山 3 号墳出土陶棺は、異なるセットの身と蓋を組み合わせている。このことは身の受け部の法量が長辺約 150㎝、短辺約 41㎝であるのに対し、蓋の合わせ部の法量が長辺約 144㎝、短辺約 33㎝であることから明らかであるといえる。

土師質亀甲形陶棺の場合は、前後で別個体を組み合わせている例が、奈良市津風呂陶棺古墳出土例（伊達・泉森 1976）や同市狐塚 2 号横穴墓奥棺（篠原・立石 1985）などいくつか知られている。しかし須恵質（系）四注（寄棟）式陶棺で別個体を組み合わせた事例は、本例が知られるのみである。

また、蓋には楔形銅板が内面・外面に取り付けられている。この楔形銅板は、報告書では蓋に入ったひび割れを補修するためのものと指摘されている。今回の再調査によっても、楔形銅板は蓋の補修のためのものと理解した。

蓋のひび割れはかなり大きく、ここまで大きなひび割れがある陶棺が古墳で実際に使用された例は他にはない。ひずみやひび割れが大きな個体は窯などの製作遺跡や、流通の拠点を担ったと考えられる集落遺跡で出土することから、棺として不適なものは埋葬には用いられなかったと考えられる。

このように、本来は用いられないような部材を組み合わせてまで埋葬に使用したという点は、本棺の特殊性を示している。須恵質（系）四注（寄棟）式陶棺は身の受け部と蓋の合わせ部がうまく合わさるように、セットで製作されるのが通例である。本例では、そのセット関係が崩れたものの、あらためて棺を一から用意するのではなく、ありあわせのものを組み合わせて代用したとみられることが明らかとなった。

陶栓　本陶棺の陶栓は、無軸の円盤状のものである。この形状の陶栓は蓋本体から刳り抜いて製作されるか、円孔の径より少しだけ小さく作られるかのいずれかであり、差し込むとうまくはまり抜け落ちない。しかし本例では、陶栓の径が蓋の円孔の径よりもさらに小さく、そのままはめようとすると抜け落ちてしまう（写真 5）。はまった状態で残存している短側面では、そこで空隙に木屑を詰めて、蓋に陶栓がかみ合うようにしていることが確認できる。

こうした状況から、この陶栓は、本来は別個体の蓋に用いられる予定のものであったと考えられる。しかし竜田御坊山 3 号墳棺を製作するに際し、何らかの理由で代替的に使用されたものと考えられる。ありあわせの部材を組み合わせるという状況は、先の身と蓋の状況とも共通する点である。

なお本陶棺は、円孔に陶栓をはめたのちに漆が塗られ、円孔は完全にふさがれている。このことから、蓋短側面の円孔は埋葬時には機能しておらず、陶棺製作時に必要なものであったと考えられる。その機能としては、焼成時に破裂を防ぐためや、蓋短側面周辺の内面調整をおこなうためなど、複数が想定される。このようなことがわかる陶棺は、本例が唯一である。

削り取られた身上端部および蓋下端部　本陶棺の身と蓋が、それぞれ別個体ものを組み合わせていることは、先にも述べた通りである。別個体の身と蓋を組み合わせているために、組み合わせ部の法量・形状が異なり、そのまま組み合わせることはできない。そのため身上端部および蓋下端部を削り平滑にすることによって、無理やり両者を組み合わせることができるようにしたものと考えられる。

この造作の結果、身上端部および蓋下端部は平坦に整形され、受け部がなくなった状態となっている。身の両長側面には径 1㎝程度の小孔が上下 2 個ずつ、計 3 か所に穿たれているが、身上端部が削られたことにより、これらの小孔には上半が半裁されたものもある（写真 6）。

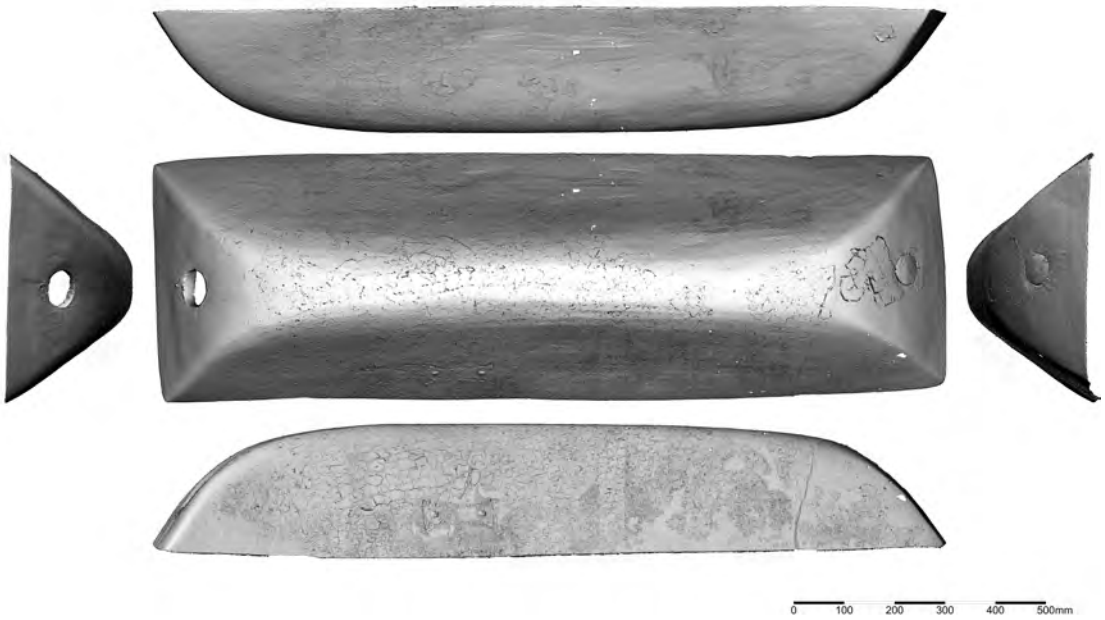
身上端部および蓋下端部が平坦となる形状は、従来から近畿地域における陶棺の最終段階を示す形状、すなわち受け部が退化した段階と理解されてきた（木村 1979 など）が、今回の再調査によって削り取られたことによる結果であることが判明した。

なおこの両端部を削り取るという行為は、陶棺の総高を低くするということについても、一役買っていたと考えられる。この点については、次に詳しく述べる。

削り取られた脚部　本陶棺の脚部は、焼成後に大きく削り取られている（写真 7）。このサイズの陶棺であれば他の事例から本来は高さ 15㎝程度の脚部が付くのが一般的である。しかし本例では最高でも 5㎝程度であり、なかにはほぼすべて削り取られている脚部もある。このことから、10～15㎝は削られたと考えられる。

このようなことがおこなわれた理由として、石槨の大きさと陶棺の大きさの関係が考えられる。横口式石槨の内法は、高さ約 52㎝×幅約 68㎝×奥行約 216㎝である。これに

外面



内面

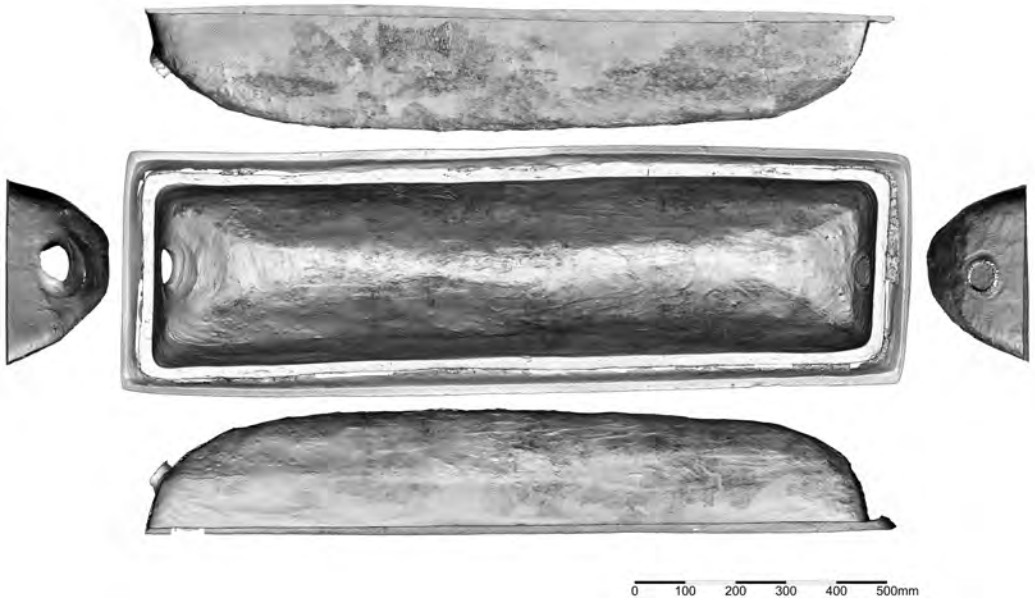
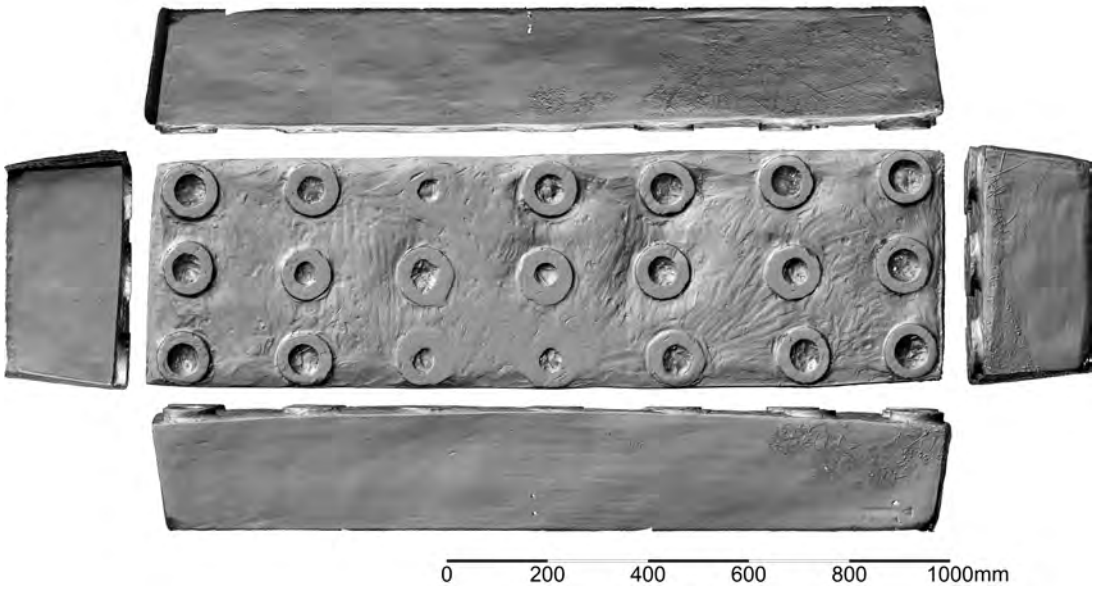


図６　陶棺蓋（三次元形状計測画像）（S=1/15)

外面



内面

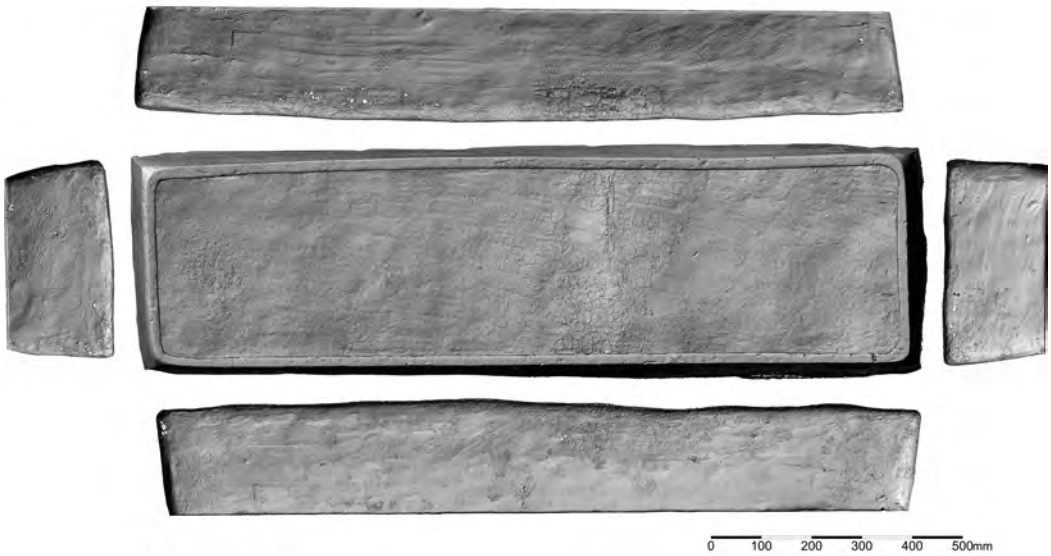


図７　陶棺身（三次元形状計測画像）（S=1/15）

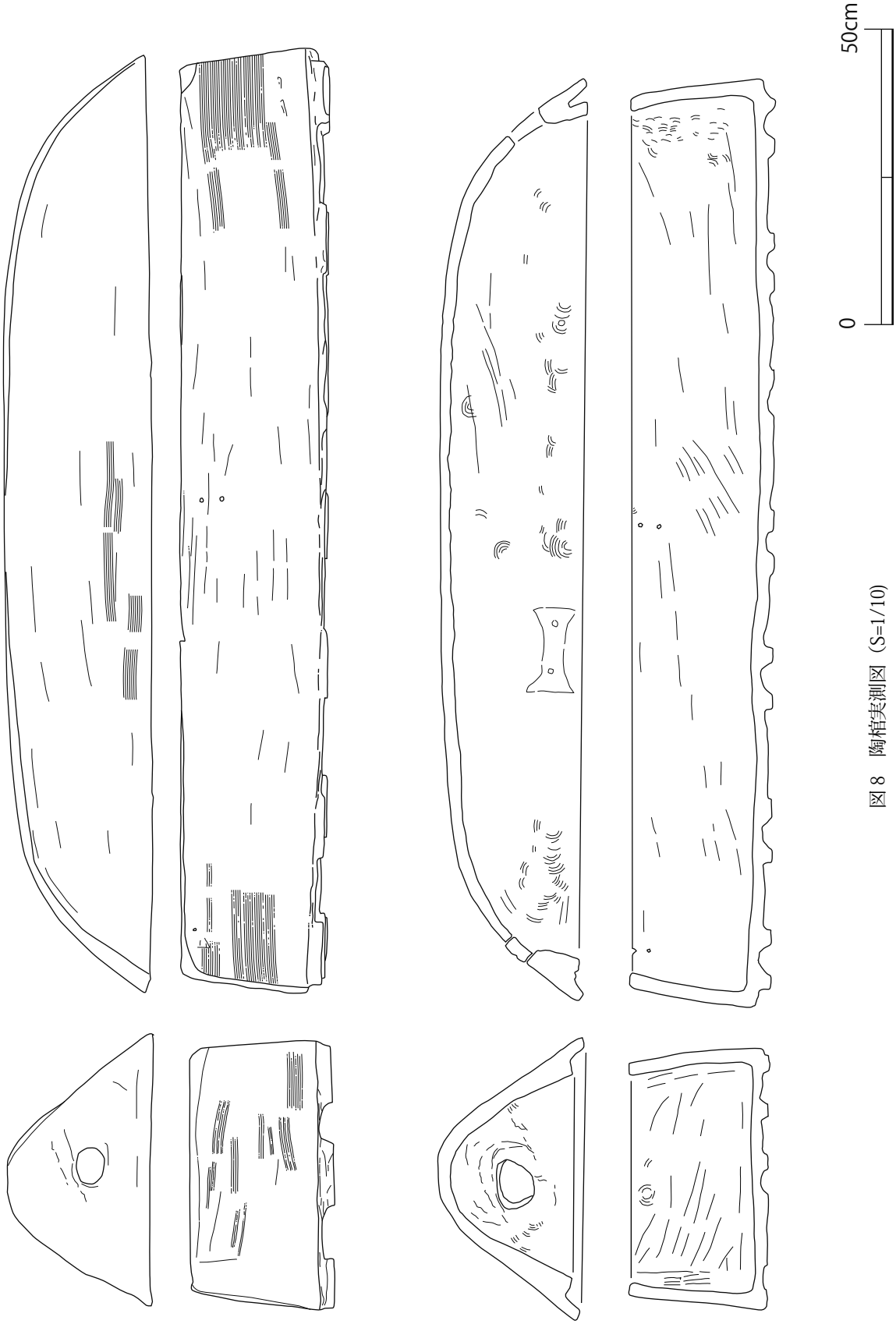


図８　陶棺実測図（S=1/10）

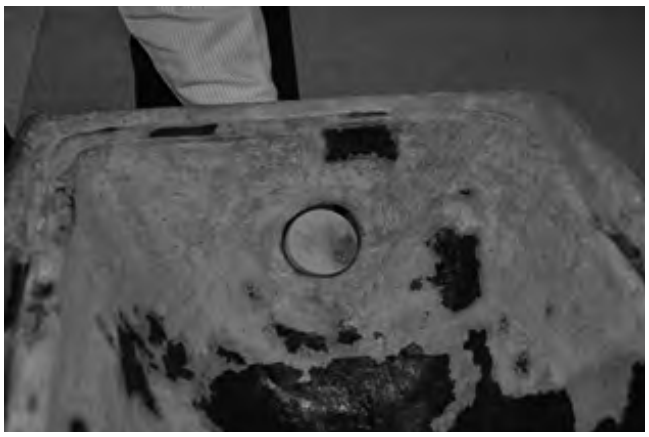


写真5　蓋の円孔と陶栓の関係

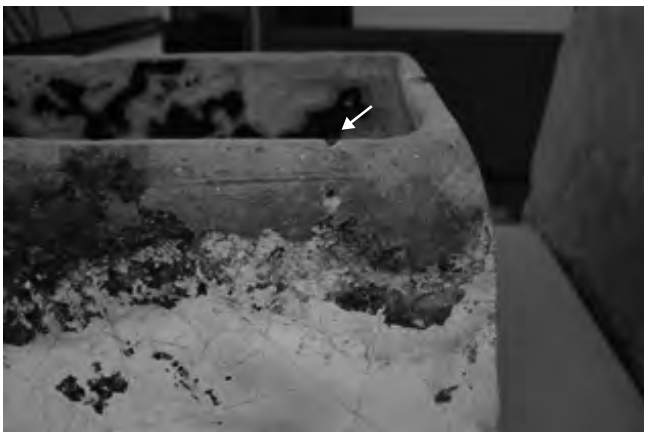


写真6　半裁された小孔

写真7　削り取られた脚部

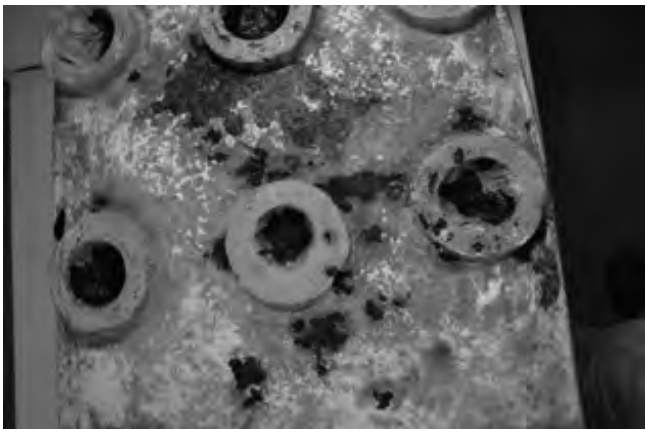


写真8　底部外側に塗布された漆

対して陶棺の大きさは、身と蓋を合わせた法量が高さ約47㎝×幅約46㎝×長さ約158㎝であるので、石槨内に陶棺をおさめると高さに関しては特に余分な空間のないことがわかる。このことから、陶棺に本来の形状の脚部が付いていた場合、石槨内におさめることができなかった可能性が高い。そのため、石槨内に陶棺をおさめるために、最も加工が容易で、かつ大きく改変することができた脚部を削ったと考えられる。

漆の塗布範囲　従来、本陶棺は、漆が塗られていることで著名であった。今回の調査で漆の付着範囲が底部外面にまで及んでいることが判明した（写真 8）。本陶棺は、身蓋ともに内面・外面全面に漆が塗布されていたことになる。これは意図的に全面に漆を塗ることによって、黒色の漆棺を作ろうとしたものと理解できる。また、身上端部、蓋下端部、脚部の切断面にも漆が塗布されていることから、漆の塗布はこれらを削り取ったのちに行われたことがわかる。本陶棺が、全面に漆を塗布することによって漆棺とされていることの意味については、次章で検討する。

（3）小結

ここまで、今回の再調査によって新たに得られた本陶棺の新知見およびその背景について検討してきた。

今回の調査では多くの知見が得られたが、それらは埋葬に際しての緊急性を示している。すなわち被葬者を急に埋葬する必要がでてきたため、急遽ありあわせの棺の部材を使用し、石槨内におさめられないとなると削って大きさを減らし、新たなものを用意するのではなく破損しても修復して使用し、何とか埋葬を終えた様子がうかがわれる。その一方で漆を棺の全面に塗布するなど、丁寧な加工を施して形式を整えようとする姿勢もみられる。このようなことが起こる理由については、次章で改めて検討する。

（前田）

V．考察

（1）横口式石槨の評価

横口式石槨を解体して調査することは、非常に稀なことである。そのため各石の組み合わせ方法や加工痕跡など多くの情報を得られたこと、三次元形状計測により各石の詳

細なデータを得られたことが大きな成果である。再調査により得られた新知見について述べる。

漆喰が蓋石と底石の接地面で確認された。また、蓋石刳込部の側面と天井部でも漆喰を確認したことから、石槨内全体に漆喰が塗られていたことが明らかとなった。ただし、漆喰以外の顔料や金箔等は確認できなかったことから、壁画・天文図等はなかったものと考えられる。蓋石と底石の接地面だけでなく、蓋石刳込部全面に漆喰が塗られていたことから、密閉性を高めようとしたと考えられる。

蓋石外面の上面と側面、底石の底面で確認した溝状の工具痕跡は、当時の石材加工技術の一端を知る手がかりとなろう。今後の類例の増加を待って改めて検討する。また、今回の再調査からは、従来の築造時期に関する年代観を変更する新たな知見を得ることはできなかった。

（北井）

（２）出土陶棺の評価

陶棺の年代　陶棺はその製作技法や各部位の形状を基に、編年がおこなわれてきた。なかでも脚部の本数や高さ、身と蓋の組み合わせ方などが編年の重要な指標とされてきた。すなわち脚部は本数が次第に少なくなるとともに、高さも高いものから低いものへと変化する。また身と蓋の組み合わせ方も、身に蓋が組み合うように精巧な造作を施すものからより簡素なものへと変化する（絹畠 2013）。

本陶棺は、脚部の高さが極めて低いこと、身と蓋の組み合わせ部分の造作が極めて簡易な形状となっていることといった特徴から、近畿地域における陶棺の最終段階に位置付けられてきた（木村 1979、宮本 1994 など）。

しかし、今回の再調査によって、最終段階とされてきた指標が、陶棺製作後に手を加えることによって生じたものと判明した。よってこれまでの位置づけについても再検討する必要がある。ここでは、本陶棺の本来の形を製作当初の形状を残す部位から復元し、その年代をあらためて検討する。

上述したように、陶棺の年代を判断する指標としては、脚部の本数や全体高があげられ、脚部の本数は次第に減少する。すなわち行数が 3 行から 2 行になり、列数も 12 列から 10 列、8 列、やがては 6 列へと漸次的に減少していき、なかでも列数の変化の傾向がより強い。また、陶棺全体の高さも低くなり、中でも蓋の高さがとりわけ低くなる傾向がある（絹畠 2013）。これらの指標を基に、出土陶棺の年代を検討する。

本陶棺の脚の本数は、その痕跡から当初は 3 行 7 列の計 21 本であったことがわかる。同様な脚部配置の陶棺例は少ないものの、京都府長岡京市走田 8・9 号墳間出土例（山本編 1997）や奈良県御所市櫛羅出土例（山中 1906）が知られている。これらの陶棺は埋葬時の状況が不明である点が多いため、共伴遺物から年代を決めることが難しい。

脚部の配置が 7 列の陶棺は少ないが、8 列のものと 6 列のものは、比較的多くの事例が知られている。8 列配置の陶棺は、京都府長岡京市芝 12 号墳出土例（木村 1979）や大阪府茨木市桑原Ａ3 号墳出土例（一瀬・小川編 2008）、兵庫県芦屋市八十塚岩ヶ平 1 号墳出土例（森岡・古川編 1979）などがある。また 6 列配置の陶棺には、京都府長岡京市北平尾 3 号墳出土例（木村 1979）や大阪府東大阪市墓尾 1 号墳出土例（原田 1971）などがある。前者は 7 世紀初頭から中葉で、後者は 7 世紀中葉が中心である。このことから、7 列配置の陶棺は 7 世紀の前葉から中葉にかけての製作が想定され、竜田御坊山３号墳の出土陶棺の身についても脚部の配置から同様の製作時期が考えられる。

本例は身と蓋で製作時と異なるセットが組み合わされているが、蓋の高さは 24㎝、身の高さ 25㎝でほぼ同じ高さである。身は上端部が削り取られているとはいえ、蓋の占める割合は高い。これに類似する高さの蓋をもつ陶棺は、京都市石見上里古墳出土例（木村 1979）や京都府長岡京市芝 12 号墳 2 号棺（木村 1979）などがある。これらは 7 世紀初頭から中葉にあたる陶棺である。また削り残された身との合わせ部は、蓋内面に粘土を付け足して成形されており、その端部には突起を作り出して、より身とうまく合うような造作はなされていない。この形状は、大阪府羽曳野市飛鳥千塚出土例（太田 1998）をはじめ、多くの陶棺にみとめられ、こちらも 7 世紀初頭から中葉にみられる特徴である。

なお身については、部分的に残る上端部は、端部の内面に粘土を付け足して形成されている。このような形状の受け部をもつ陶棺は、京都市石見上里古墳出土例（木村 1979）や大阪府豊中市中井山 1 号墳出土例（豊中市史編纂委員会編 2005）などがあり、時期は 7 世紀の前葉から中葉にかけてである。これは先に見た脚部の本数から想定される年代観と整合する。

これらの要素を総合すると、本陶棺の年代は、蓋は 7 世紀初頭から中葉、身は 7 世紀の前葉から中葉となり、蓋は身に比べてやや古い様相もあるが、おおむね同時期といえよう。本陶棺はこれまで近畿地方の須恵質（系）陶棺編年の最終段階にあたり、かつ孤立した位置づけになるとされてきたが、今回の検討の結果、前段階の陶棺と同型式で、その製作年代は 7 世紀中葉以前[(2)]に位置づけられることが明らかとなった。

陶棺の製作地　本墳周辺では、これまでに陶棺製作遺跡は発見されていない。ではこの陶棺はどこからもたれされたものであろうか。

陶棺は、地域ごとに製作技法等に共通性がみとめられる（絹畠 2013）。このことから、陶棺の生産については大規模製作地における一元生産ではなく、地域単位での生産および流通が指摘されている（中村 2004、前田 2008）。そこで今回は、本陶棺の製作技法から、その製作地について検討する。

陶棺の製作地を考えるうえで重要な製作技法の要素としては、内面・外面の調整や蓋天井部の形状、脚部の円孔、焼成等があげられる。このうち本陶棺は脚部が削られているため、脚部以外の要素からその製作地を探っていく必要がある。

まず陶棺の内面・外面の調整から見ていく。本例は身・蓋ともにタタキ調整がなされ、内面には当て具痕の円心円文が残る。外面のタタキ痕は身・蓋ともに丁寧にナデ消されている。内面の当て具痕の円心円文についてもナデ消そうとしているが、短側と長側のコーナー部分付近は、明瞭に残されている。なお、陶棺成形時の粘土積み上げ痕は、ナデにより丁寧に消されている。

陶棺の内面・外面の調整に、地域ごとの特徴があるということは、先に述べた通りである。近畿地方で須恵質（系）陶棺がまとまって分布する地域としては、千里丘陵や乙訓地域、和泉丘陵周辺などがあげられる。

これらの地域のなかで、千里丘陵では身・蓋ともに内面・外面にナデが施されるものが多く、なかでも外面のナデは丁寧である。乙訓地域では身・蓋の外面にはハケメが施されるものが多く、このほかにも焼成がやや甘い点も特徴である。和泉丘陵周辺でも身・蓋の外面にはハケメが施されるものが多くみられるが、こちらではナデが施されるものも一定数存在する。ただ、ナデは粗く、ナデの単位が明瞭であるものや、タタキの痕跡が残るものも散見される。本陶棺は、こうした各地域の陶棺の調整技法から、千里丘陵の陶棺との共通性を見出すことができる。

次に、本陶棺の蓋の天井の形状は、天井部の頂部に明確な平坦面をもつ。このような特徴は、千里丘陵や乙訓地域をはじめとした淀川流域の各地の陶棺で多くみられる。これは、蓋の頂部に鋭い稜をもつ和泉丘陵周辺の陶棺とは対照的である。

このように本陶棺の製作技法および形状は、淀川流域、なかでも千里丘陵周辺の陶棺との共通性がみとめられた。ただし身・蓋の外面にハケメ調整が施されること、身のコーナーが鋭い稜をなすことなど細部の差異も多く、単純に千里丘陵で製作された陶棺が竜田御坊山 3 号墳にまで運ばれて、埋葬に使用されたとは考えづらい。陶棺が広域流通しないという視点に立つと（中村 2004、前田 2008）、千里丘陵の陶棺製作技法をもとにして、竜田御坊山３号墳周辺において生産されたと考えたい。

奈良県出土の須恵質（系）陶棺　奈良県ではこれまでに 7 例の須恵質（系）陶棺が確認されている。このうち 1 例は亀甲形、3 例は四注（寄棟）式で、残る 3 例は形式不明である。本陶棺は四注（寄棟）式陶棺である。

奈良県では土師質亀甲形陶棺が数多く出土しているが、これと比較して須恵質（系）陶棺は少数である。前者が平城山丘陵などにまとまる分布を示すのに対し、後者は集中的に出土することはなく点的な分布を示す（図 9）。

須恵質（系）陶棺は、須恵器窯周辺に分布することが多いことから、須恵器生産に携わる集団の棺という指摘がなされている（中村 2004 ほか）。また須恵器生産集団をミワ部と想定し、須恵質（系）陶棺をミワ部の棺とする見解も示されている（菱田 2005・2007）。この見解に対しては否定的な側面を指摘する意見もあるが（高橋 2007 ほか）、須恵質（系）陶棺と須恵器生産との関係は重要な視点であると考える。

一方、奈良県の須恵質（系）陶棺を須恵器生産と結びつけるのは困難である。奈良県の須恵質（系）陶棺の分布は、須恵器窯の分布とは一致しない。地域ごとに単発的に使用されていることからも、須恵質（系）陶棺が特定の集団に固有の棺であったとするのは難しい。

竜田御坊山 3 号墳が位置する斑鳩地域および周辺は、比較的陶棺がまとまって出土する地域である。古墳出土例

は、仏塚古墳および本例の 2 例のみであるが、その他の例の出土状況を鑑みるに、斑鳩地域は陶棺を多用する地域といえる。使用される陶棺の多くが土師質（系）陶棺であることから、本例で突如として須恵質（系）四注（寄棟）式陶棺が採用されたといえる。

このように斑鳩地域周辺は、土師質（系）陶棺を採用する地域であったと考えられる。竜田御坊山 3 号墳の被葬者の埋葬は緊急事態であったと想定されるが、そのような事態にあってもあえて陶棺を採用したのは、型式は異なるものの、斑鳩地域という地域性に依ったものであるかもしれない。

漆棺と本陶棺　本陶棺の特徴の一つとして、身および蓋に漆が塗布されている点があげられる。漆は身・蓋の内面・外面に塗られているが、なかでも身の内面には漆が広範囲に残っていた。

漆棺は全国で 23 例確認されている（表 1）。漆棺には夾紵棺、漆塗木棺、漆塗籠棺などがあり、漆塗陶棺は本墳の 1 例が知られているのみである。漆棺が使用される古墳はきわめて限定的である。漆棺は大王家が被葬者とみられる古墳をはじめ、地域における最上位の古墳に採用されることが多い。このことから、漆棺に納められた被葬者はきわめて身分の高い人物と考えられ、なかでも夾紵棺は特に階層が高い人物にのみ採用された。

あらためて本陶棺は漆棺であり、類例はこれ以外に知られていない、きわめて稀な存在である。他の漆棺の例から本陶棺の被葬者の階層はきわめて高かったと考えられるが、これは横口式石槨が採用されていることや副葬品の様相からも追認できる。副葬品には、三彩有蓋円面硯やガラス製筆管、琥珀製枕がある。これらの遺物は日本ではほかに例がなく、先に見たように、三彩有蓋円面硯とガラス製筆管は舶来のものである。また、琥珀製枕については琥珀製品として日本出土例中最大のものである。これらのことから、竜田御坊山 3 号墳の被葬者はきわめて貴重な文物を入手できる立場にあった人物と考えられ、漆塗陶棺からも、被葬者の身分の高さをうかがい知ることができる。

（前田）

（3）築造年代と被葬者像

以上の新知見を踏まえて、最後に竜田御坊山 3 号墳の築造年代と被葬者像について今一度考えてみたい。

まず築造年代についてであるが、今回の横口式石槨の検討からは、年代につながる新たな事実は得られていない。陶棺に関しては、7 世紀前半から中葉に収まることが明らかになった。竜田御坊山 3 号墳の時期は、報告書では 7 世紀中葉以前とされ、のちの横口式石槨研究では 7 世紀後半に位置づけられていた（広瀬 1995、山本 2007 ほか）。一方、近年の横口式石槨研究では、7 世紀中葉以前に位置づけられている（重見 2017）。また、三彩有蓋円面硯の年代を元に 7 世紀前半～中頃とする見解も存在していた（河上 1995）。今回の再検討の結果は、重見・河上の年代観ともっとも符合している。竜田御坊山 3 号墳の築造年代は、陶棺の年代観と横口式石槨の後続性も踏まえて、7 世紀前半の中でも中葉よりの年代が与えられるだろう。

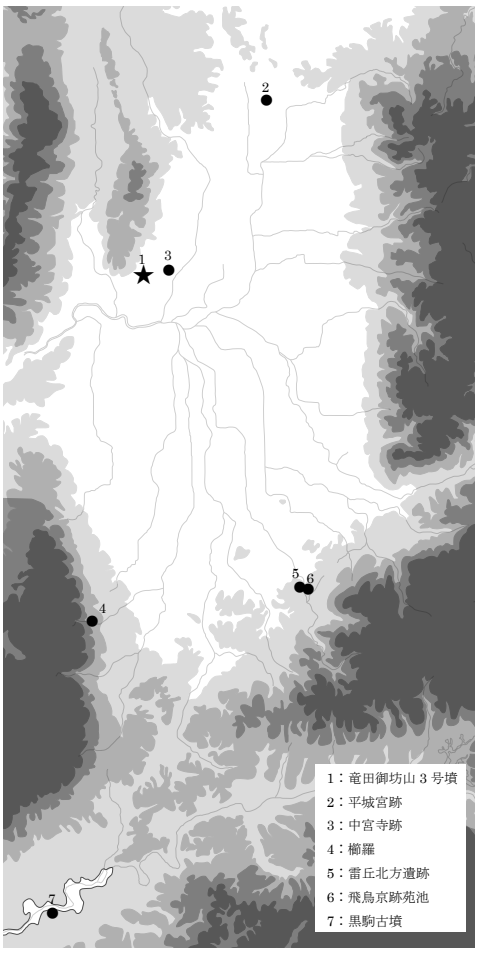


図 9　奈良県の須恵質（系）陶棺（金澤ほか 2019 改変）

最後に、竜田御坊山 3 号墳の被葬者像について考えてみたい。陶棺から見た被葬者像については、先に言及したように、竜田御坊山 3 号墳では、須恵器生産に携わる人物である可能性は、現状考えられない。むしろ、当地域では、仏塚古墳[3)]など、6 世紀代から陶棺が採用されていることが重要であろう。そうした土壌が、陶棺という棺を選択する

表 1　漆棺一覧

種類	出土古墳	所在地	時期
夾紵棺	八幡山古墳	埼玉県行田市	7 世紀中葉
	阿武山古墳	大阪府高槻市	7 世紀後葉
	（安福寺）	大阪府柏原市	—
	叡福寺北古墳	大阪府太子町	7 世紀前葉
	塚廻古墳	大阪府河南町	7 世紀中葉
	平野塚穴山古墳	奈良県香芝市	7 世紀後葉
	牽牛子塚古墳	奈良県明日香村	7 世紀中葉
	野口王墓古墳	奈良県明日香村	7 世紀後葉
漆塗木棺（木芯漆塗棺）	八幡山古墳	埼玉県行田市	7 世紀中葉
	石のカラト古墳	京都府木津川市・奈良県奈良市	7 世紀末～ 8 世紀初頭
	初田 2 号墳	大阪府茨木市	7 世紀中葉
	御嶺山古墳	大阪府太子町	7 世紀末～ 8 世紀初頭
	キトラ古墳	奈良県明日香村	7 世紀末
	高松塚古墳	奈良県明日香村	7 世紀末
	マルコ山古墳	奈良県明日香村	7 世紀末
	束明神古墳	奈良県高取町	7 世紀後葉
	岩内 1 号墳	和歌山県御坊市	7 世紀中葉
漆塗籠棺	シシヨツカ古墳	大阪府河南町	6 世紀末
	アカハゲ古墳	大阪府河南町	7 世紀前葉
	塚廻古墳	大阪府河南町	7 世紀中葉
	平野塚穴山古墳	奈良県香芝市	7 世紀後葉
漆塗陶棺	竜田御坊山 3 号墳	奈良県斑鳩町	7 世紀中葉
漆塗石棺	菖蒲池古墳	奈良県橿原市	7 世紀中葉

結果となったのであろう。

それでは、今回の再調査の結果から被葬者像を検討してみよう。横口式石槨は内面に漆喰が塗布され、陶棺にも内面・外面全てに漆が塗布されるなど、非常に丁寧に製作されていることが明らかとなった。一方、漆の塗布以外の陶棺の検討で見られた成果は、逆にその緊急性が看取される。その理由は以下の通りである。①陶棺の蓋と身のサイズが異なり、別個体を組み合わせたものである。②蓋の一部は、焼成時にひび割れたが、ひび割れの内面・外面に楔形銅板を入れて、修整を図っている。③蓋短側面の穿孔にはまるべき陶栓は、本来はその穿孔で切り取ったものを使用するが、異なるものを使用しているため上手くはまらず、木屑を詰めて無理やりかみ合わせている。④蓋と身が別個体で組み合わないために、身上端部と蓋下端部を削り、かみ合うように修整している。⑤横口式石槨の高さと陶棺の高さが合わないために、陶棺の脚部を削り、石槨内に納まるように調整している。さらに池田次郎の人骨の所見（池田 1986）から、⑥陶棺の内法が 146cm であるのに対し、棺内に納められた被葬者の身長は 150cm であり、棺と被葬者のサイズがかみ合わない。⑦被葬者の年齢が 14 ～ 15 歳である。

以上の事実を勘案すれば、竜田御坊山 3 号墳の被葬者の死は予期できなかったものであり、かつ埋葬が非常に急がれたものと推測できる。言うなれば陶棺は、被葬者の不慮の死に対応した「急ごしらえの棺」であったことを示すものと考える。一方、陶棺のひび割れ部分に珍しい楔形銅板をはめ、漆を塗布したことは、被葬者の身分の高さを示すものと考えられ、納められた副葬品の内容、精緻な横口式石槨などはこの事実を裏付けている。

このような「急ごしらえの棺」に埋葬された被葬者とは、どのような人物であったであろうか。今回の検討から浮かび上がるのは、やはりこれまでの研究史でも述べられてきた上宮王家の一族である。上宮王家は、厩戸皇子（聖徳太子）、山背大兄王父子を中心とした一族はある。上宮王家は、推古 13（601）年、厩戸皇子が斑鳩宮に移住して以降、当地域の一大勢力であったが、皇極 2（643）年に蘇我氏に謀られ、山背大兄王が自害し、上宮王家一族は攻め滅ぼされた。『日本書紀』には、一族の人数は具体的に記載されていないものの、『上宮聖徳法王帝説』によれば、その際山背大兄王の子弟、15 王子がともに亡くなったとされる。こうした人数がどこまで正確かはわからないが、踏み込んで言及すれば、竜田御坊山 3 号墳の築造年代が 7 世紀中葉と想定されることと被葬者の年齢から考えて、このうちの一人、厩戸皇子の孫世代の人物が竜田御坊山 3 号墳の被葬者である可能性が高いと考える。今後、周辺の終末期古墳の発掘調査が進めば、さらなる確信が得られるのではないかと考えている。

（絹畠）

Ⅵ. 結語

以上、竜田御坊山 3 号墳の横口式石槨と陶棺の再調査から、築造年代や被葬者像について検討してきた。横口式石槨は非常に精緻に仕上げられている一方、陶棺は蓋と身が別個体であること、横口式石槨の高さに合わせて脚部を削っていることなどの複数の事実から、被葬者の不慮の死に対応した「急ごしらえの棺」であったという結論を述べた。被葬者は、年代からも、身分の高さからも、上宮王家の一族と考えられ、その結論は、報告書刊行時と変更点はない。しかし、横口式石槨と陶棺の検討から明らかとなった諸事実は、7 世紀という激動の政治史の中で、埋葬行為への緊急性、埋葬施設と棺との関係など、非常に重要な視点を示したものと考える。一方、今回の検討では「急ごしらえの棺」として陶棺にこだわった理由については地域性以外に踏み込むことができなかった。今後、様々な方面で議論が活発化することを期待したい。

（絹畠・前田・北井）

謝辞

本稿は、2016 年 3 月 26 日及び 4 月 9 日に奈良県立橿原考古学研究所講堂で行われた、特別陳列「竜田御坊山 3 号墳－発見 50 年記念展－」第 1・2 回研究講座において、北井が「竜田御坊山 3 号墳石槨の再調査について」、前田が「竜田御坊山 3 号墳出土陶棺の新知見－最新の調査成果から－」、絹畠が「竜田御坊山 3 号墳出土陶棺の年代、製作地とその評価」のタイトルで講演したものに、第 2 回研究講座の菅谷文則前所長（故）との座談会の内容を加え文章化したものである。本研究講座と座談会を行うよう取り計らっていただいた菅谷前所長は、2019 年 6 月に御逝去された。大幅に遅くなってしまったが、本稿を霊前に捧げたい。また、本稿の出土陶棺の 3 次元計測については、JSPS 25242025（代表：今尾文昭）の成果を含む。最後になりましたが、研究講座及び本稿執筆に当たっては、多くの方々にご協力いただきました。記して感謝申し上げます。

泉森皎、今尾文昭、勝川若奈、木下亘、重見泰、平田政彦、水野敏典（五十音順、敬称略）

註

1） 創建期の中宮寺は、現中宮寺の東約 500m にある（史跡中宮寺跡）。

2） 絹畠（2013）では、寄棟式家形陶棺の型式設定を主に蓋下端部・身上端部の断面形態から行い、寄棟式 A 群の最終的な型式として竜田御坊山 3 号墳を標識とする A 3 型式を設定した。今回の再検討により、竜田御坊山 3 号墳例はその前段階の A 2 b 型式になるものと考えられ、竜田御坊山 3 号墳例を A 3 型式とすることは、撤回したい。ただし、A 3 型式には、7 世紀中葉から後葉に属すると考えられる、三重県伊賀市御墓山窯跡群 SX 4 出土例（笠井・福田編 1999）や、兵庫県美方郡香美町長者ヶ平 2 号墳例（山田・谷本 1995）なども含めており、型式設定自体は問題ないものと考えている。

3） なお、仏塚古墳の被葬者を膳氏とする見解もあるが（河上 1977）、膳氏の斑鳩地域居住を上宮王家移住と同時（7 世紀初頭）とする文献史学の見解もあり（仁藤 1998）、そうであるならば、仏塚古墳の被葬者に膳氏を当てるのは難しい。

引用・参考文献

池田次郎 1986「竜田御坊山 3 号墳人骨」『青陵』第 58 号　奈良県立橿原考古学研究所　pp.1- 3

生駒栄喜 1977「御坊山 3 号墳出土人骨の調査」『竜田御坊山古墳付平野塚穴山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 32 冊　奈良県立橿原考古学研究所　p.70

泉森皎編 1977『竜田御坊山古墳　付平野塚穴山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 32 冊　奈良県立橿原考古学研究所

泉森皎 1986「御坊山 3 号墳の副葬品について」『青陵』第 58 号　奈良県立橿原考古学研究所　pp.3- 5

泉森皎 2016「御坊山 3 号墳の調査とその後」『奈良県立橿原考古学研究所附属博物館講座資料』pp.7-14

一瀬和夫・小川裕見子編 2008『桑原遺跡―安威川ダム建設事業に伴う桑原地区の調査―』大阪府埋蔵文化財調査報告 2007- 4　大阪府教育委員会

今尾文昭編 2017『藤ノ木古墳出土品からみた考古系博物館における展示・公開に関する総合的研究』平成 25 年度～ 28 年度 科学研究費 補助金 基盤研究 A（課題番号 25242025）研究成果報告書　奈良県立橿原考古学研究所

太田宏明 1998「173・174　陶棺」『博物館資料図録』関西大学博物館　pp.140-143

笠井賢治・福田典明編 1999『御墓山窯跡発掘調査報告―三重県上野市佐那具町所在―』上野市文化財報告 49　上野市教育委員会

金澤雄太・前田俊雄・絹畠歩・岩越陽平 2019「葛城山東麓における群集墳の展開と多様性の意義―御所市石川古墳群・櫛羅古墳群からの視点―」『研究紀要』第 23 集　公益財団法人由良大和古代文化研究協会　pp.155-201

河上邦彦 1977「第 4 章　まとめ」『斑鳩・仏塚古墳』斑鳩町教育委員会　pp.42-46

河上邦彦 1995『後・終末期古墳の研究』雄山閣

絹畠歩 2013「古墳時代後期から終末期における陶棺の分類・編年と系統―土師系陶棺と須恵系陶棺―」『古代学研究』第 198 号　古代学研究会　pp.1-24

木村泰彦 1979「山城地方出土陶棺集成」『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』第 1 集 長岡京跡発掘調査研究所　pp.33-78

重見泰 2017「「今城」の創出と飛鳥の陵墓群―「中尾山」出土の土器群とその性格―」『古代学研究』第 213 号　古代学研究会　pp.1-22

篠原豊一・立石堅志 1985「山陵町狐塚横穴群の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和 59 年度　奈良市教育委員会　pp.8 -21

白井克也 2000「日本出土の朝鮮産土器・陶器―新石器時代から統

一新羅時代まで―」『日本出土の舶載陶磁―朝鮮・渤海・ベトナム・タイ・イスラム―』東京国立博物館　pp.90-120
白井久美子 2019「琥珀の枕」『玉文化』第 16 号　日本玉文化研究会　pp.93-98
高橋照彦 2007「須恵器工人の存在形態に関する基礎的検討」『須恵器生産における古代から中世への変質過程の研究』大阪大学大学院文学研究科　pp.129-168
伊達宗泰・泉森岐 1976「津風呂陶棺古墳」『奈良県古墳発掘調査集報 I』奈良県立橿原考古学研究所　pp.24-30
中国社会科学院考古研究所（編）1980『唐長安城郊隋唐墓』文物出版社
土橋理子 2001「唐三彩とその周辺」『日中の考古学―日中の 7・8 世紀の考古学―』第 18 回橿原考古学研究所公開講演会資料　奈良県立橿原考古学研究所　pp.30-33
豊中市史編纂委員会編 2005『新修豊中市史』第 4 巻考古　豊中市
中村展子 2004「生産からみた陶棺の変容とその背景」『洛北史学』第 6 号　pp.75-101
楢崎彰一 1977「緑釉磚からみた彩釉陶器の成立」『川原寺裏山遺跡出土品について』仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書第 4 冊　pp.3- 5
仁藤敦史 1998『古代王権と都城』吉川弘文館
原田修 1971『墓尾古墳』東大阪市教育委員会
菱田哲郎 2005「須恵器の生産者」『列島の古代史』 4　岩波書店　pp.203-240
菱田哲郎 2007『古代日本国家形成の考古学』京都大学学術出版会
広瀬和雄 1995「横口式石槨の編年と系譜」『考古学雑誌』第 80 巻第 4 号　日本考古学会　pp.438-478
前田俊雄 2008「桑原西古墳群出土陶棺について」『桑原遺跡群』大阪府教育委員会　pp.60-64
光本順 2001「 6・7 世紀における陶棺の変容とその特質―定東塚・西塚古墳出土陶棺の評価によせて―」『定東塚・西塚古墳』岡山大学考古学研究室　pp.257-290
宮岡昌宣 2012「陶棺からみる畿内と吉備」『考古学研究』第 59 巻第 1 号　考古学研究会　pp.60-80
宮本康治 1994「堂山 3 号墳出土陶棺の位置づけとその系譜」『堂山古墳群』北河内における遺跡の調査　大阪府教育委員会　pp.111-116
室賀照子・竹中亨 1989「奈良県曽我遺跡および御坊山古墳出土琥珀の産地同定（第 1 報）」『研究紀要』第 1 集　財団法人由良大和古代文化研究協会　pp.111-117
森岡秀人・古川久雄編 1979『芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査』芦屋市文化財調査報告第 11 集　芦屋市教育委員会
山内紀嗣 1998「上宮王家の墓」『網干善教先生古稀記念考古学論集』上　網干善教先生古稀記念論文集刊行会　pp.911-926
山田宗之・谷本進 1995「村岡町長者ヶ平 2 号墳出土の家形陶棺」『但馬考古学』第 9 号　pp.27-32
山中樵 1906「大和國櫛羅村發見の陶棺」『考古界』第 6 篇第 1 号　考古学会　pp.1-5
山本彰 2007『終末期古墳と横口式石槨』吉川弘文館
山本輝雄編 1997「走田古墳群第 1 次・海印寺跡第 3 次（7CKPME-3 地区) 調査概要―走田古墳群・海印寺跡―」『長岡京市文化財調査報告書』第 36 冊　長岡京市教育委員会
李知宴 1985「日本出土の緑釉滴脚硯」『奈良・平安の中国陶磁―西日本出土品を中心として―』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館　pp.93-97